

意気 : 追懷

著者	待鳥, 清九郎
雑誌名	龍南
巻	2 0 0
ページ	7 9 - 8 0
発行年	1926-12-25
その他の言語のタイトル	意気 : 追懷
URL	http://hdl.handle.net/2298/8910

意 氣

待 鳥 清 九 郎

義經記を見ると辨慶は立往生を遂げることになつてゐる。彼は死んでも主義經を忘れず、其の靜かに自害するのを護る爲に、突立つたまゝ敵を近づけなかつたといふのである。義經記の作者は「がうのものは立ながら死する事あると云ぞ」といつてゐるが、辨慶は實に豪中の豪なるものである。同じく立往生を遂げた者に保元物語の爲朝がある。爲朝が快傑であることはいふまでもない。

作者は立往生が出来るかどうかと深く考へて書いたのではなく、「がうのもの」にふさはしい死に方として之を選んだものであらう。私は今立往生の詮索をしようとするのではなく、立往生といふ、國民傳説中の一挿話に潜んでゐる精神を讀まうとするのである。

「斃而後已」といふ言葉は人生の意氣を現はしたものとて面白いが、若し「斃れても已まない」意氣があつたら一層痛快であらう「斃れても已まない」意氣は吾が古武士が残した説話の中に澤山現はれてゐる。立往生といふことも要するに此の意氣を示すものではあるまいか。

人として失ひたくないものは意氣である。敢て人には限らない、國家然り、團體然り、學校亦然りである。

私は第五高等學校に入學して取り敢へず「剛毅木訥」といふことを聞かされて聊か驚いた。と同時に甚だ愉快であつた。勿論三年間の經驗によつて「剛毅木訥」の精神が徹底的に校内に充満してゐると思はなかつたが、兎に角「剛毅木訥」の大旗を振翳して進むところに一種いふべからざる美しい意氣の閃きを見逃がすことは出来なかつた。さうしてその閃きに思はず引着けられ

溶けこまされ、遂には自分も「剛毅木訥」そのもゝ様な氣になつて、三年間を愉快に過ごしたのであつた。年齢の關係もあつたかも知れないが、高等學校生活によつて始めて意氣といふものを臚氣ながら理會し得たことは確であると思ふ。

思出深い高等學校、其の生活記録である「龍南」が二百號を重ねるに至つたことは眞に目度いことである。勿論「龍南」がどういふ生き方をして來たかは今問ふ必要はない。問題は將來にかゝつてゐる。第五高等學校は永久續くであらう。「龍南」も亦永久續くに違ひない。併し只續くだけではいけない。澄澗たる力が籠つてゐなくてはだめである。斃れても已まない意氣を以て益々發展しなければならぬのである。二百號を以て雄飛の新しい階段とすることが出來たならば、此の記念號の意義は愈々深いものとなるであらう。